

「頼り合える」社会の構築

『中央公論』201年8月号の井手英策・慶應義塾大教授と熊谷晋一郎・東京大准教授の対談が興味深い。テーマはアベノミクスに替わる選択肢は何か、「頼り合える」社会の構築と財政について話そう。

井手 困った人を助けよう、と言った瞬間にそっぽを向く人たちがこの社会には大勢いる。まさしく弱者性の否認が分断を生んでいるのです。みんなが不安に怯えながら、誰かを叩くことで自己満足を得ている。それが幸福な社会と言えるのでしょうか。

熊谷 たしかに、私たちのような障害者がうらやましがられるとか、特権を持っているように見えているのだろうと感じることは多いです。

井手 そういう感覚は障害者の中にもあるのではないのでしょうか。

熊谷 あると思います。そして、それは入れ子状になっていて、キリがない。そのことが、障害者同士の連帯を阻んでしまうケースもあります。

井手 結局、人間と人間が互いの違いについて考えだすと、対立が始まります。両方が必要とするもの、大切にしているものを考えなければならない。社会の議論や運動の基本は、相違点ではなく、共通点を探っていくことのはずです。それが普遍主義につながると思うのです。普遍主義、要するに特定の誰かではなくて、すべての人々の幸福を考える。サービスもみんなに出す。これが、社会の格差を小さくすることや、社会の分断を弱めていくことは、さまざまな研究で明らかになっているのです。

熊谷 私がずっと取り組んできた当事者研究という活動は、当事者運動とは別様の切り口が求められている現場で誕生したものです。たとえば一口に障害者と言っても、いろいろな人がいるのですが、障害者運動と言った時に、その内部的な差異が捨象されて、対外的な差異が強調されがちです。差異のポリティクスというのでしょうか。たしかにそういう局面が必要な場面はあって、差異が過剰に無視されるような場面においては、そこを少し先鋭化することが必要になる。その意味で、当事者運動というアプローチは大変重要なのですが、それによって当事者同士の分断が起き、普遍性の認識から遠ざかることがあるのも確かです。

井手 つまり、差異をなくそうとすると、その一方で、その内側で差異を作ろうとしてしまいがちだということですね。



熊谷 運動は、運動体内の差異を捨象し、局地的な「我々」を立ち上げ、一丸となるような論理を持ちます。その結果、運動体内部で否認された差異が内部分裂の燃料になる。また、強調された、複数の運動体間の差異が、運動体を跨ぐような連帯を阻むこともあります。だから、社会を変えたいという目的論的なロジックをいったん脇に置いて、差異を研究資源として楽しみ、お互いを知り合うためだけのコミュニティを作ろうよ、というのが、当事者研究です。

やってみると、興味深いことに、カテゴリーがだんだん薄まっていく。当事者研究は差異=個別性を志向しますが、それをみんなで行うことで、自然と共通点が発見されるのです。統合失調症と身体障害はこう同じなのか、とか、障害者が持っている苦痛と介助者が持っている苦痛とが地続きであることがわかったりとか。私は普遍主義というものを醸成していくには、いったんこの過程を経る必要があると思っています。

(2017年8月17日)